

研究ノート

宝満山大巡行ルートの遺構

—大南窟および中院について—

山村 信榮・中村 茂央

1 はじめに

太宰府市と筑紫野市に広がる宝満山は平成25（2013）年10月に史跡となり、令和2（2020）年3月には太宰府市と筑紫野市共同で保存活用計画が策定され、法的には十分な保護が施された山岳遺跡である。一方ではモバイルコンテンツの普及によるトレッキングブームやアニメの聖地巡礼と称して、今まで山に入ったことのない来訪者が増加し、作道や遭難事故など予期していなかった事態が起こっている。遭難事故の原因には山中での旧跡探しも含まれ、憂うべき状況もある。一方で学術的な山中での遺跡の記録化や評価は立ち遅れており、現状が保たれているうちに測量や画像記録などの作業が急務となっている。本稿では平成14（2002）年頃より断続的におこなってきた記録調査のうち、宝満山大巡行ルートの復元に係る大南窟および中院跡について触れる。調査に当たり石橋弘勝氏（宝満山修験会）、小西信二氏（元太宰府天満宮文化研究所）のご協力、ご指導を得た。現地での測量は令和2（2020）年に山村と中村で行い、遺物については中村がまとめた。

2 宝満山大巡行ルートと遺跡

宝満山（標高829m）は奈良時代においてはすでに仏教を含む祭祀が山中の要所においておこなわれ、平安後期から鎌倉期には現在の竈門神社境内地となっている大よそ標高450m以上における各所では、経塚の造営や段造成がおこなわれ、祭祀の場から行場、行者の一時的な居住の場となった。近世には行者達によって山頂直下まで坊として開かれ、石垣と石段による居住空間が広がる景観となった。宗旨としては最澄や円仁が渡唐に際して参籠した所以から古代以来、天台の影響が大きく、近世の修験者たちも本山派の聖護院の傘下にあった。近世には比叡山に倣い、夏の夜中の行として山内の聖地を巡る「大巡行法」がおこなわれた。宝満山での大巡行については森弘子氏が『宝満山の環境歴史学的研究』（2008年）でまとめられている。氏の調査によれば宝満山の南坊永福院（新宮町）に『高橋賢俊一代記』『当山大巡二教之伝書並勤行之定書』『大巡行法』（天保8（1837）年）などの文書があり、『竈門山旧記』や『筑前国続風土記附録』（以下『附録』とする）の記述を併せ読むことにより、そのルートとその場での行法を復元できるとしている。それによれば大巡行は東院谷にあった薬師堂を起点として右回りで大略、法城窟、福城窟、益影井、冠石、中院、大南窟、大講堂（現中宮跡）、神楽殿、行者堂、梵字石、針耳、馬蹄岩、本社（山頂）、舞台石、風神、釜蓋窟、八葉峰、仏頂山、普地岩屋、八大童子、剣岩屋、船石、獅子宿、雨宝童子（水場）を経て薬師堂に戻るルートであった。近世の宝満山はそれ以前には行場や聖地であった場に生活の場としての坊を置いたため、聖と俗が同居するような感があるが、この巡行で選定された行場は、往時の山内における聖地観を示すものとして注目される。筆者は森氏の同論文に「天保八年大巡行法」のルート図を提供したが、中院の跡をその後の調査で再確認したため、本稿で修正して再提示したい。

大巡行ルート中で東院谷の生活域から外れる東側の行場に中院と大南窟がある。両者の位置は『宝満山山中絵図』や次の『附録』の記載が根拠となる。

「(冠石の記載の後) 是より一町許下、路の南に中院谷あり。不動・毘沙門ノ堂も此所にあり。此堂

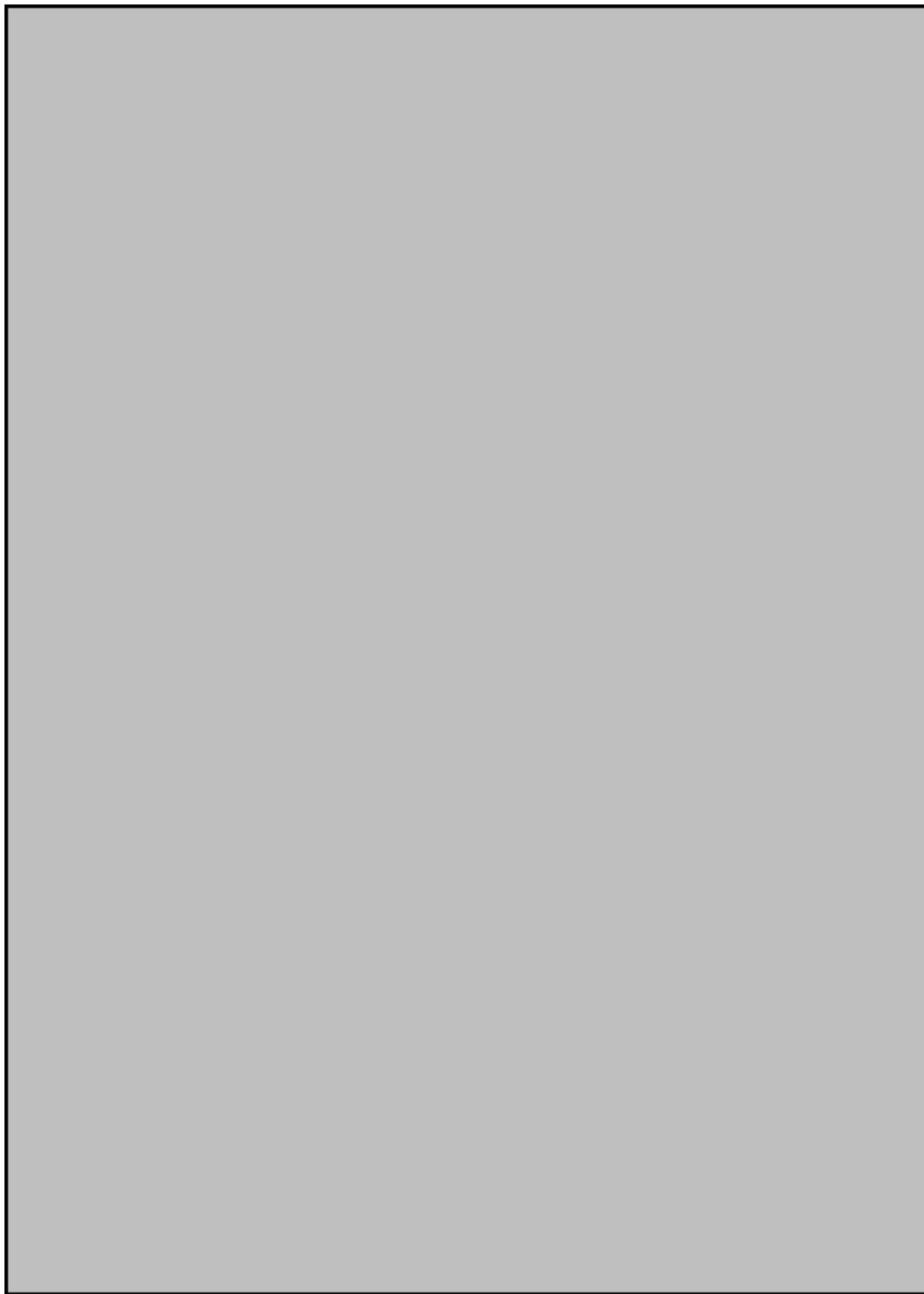


図1 宝満山大巡行巡行路復原図（参考文献 森2008「大巡行道華上所」表より）

の北に軍陀利夜叉明王、烏須沙摩明王あり。又一町許下に飛礫石嶺といふ所あり。此峯の南に蟾蜍石といふあり。夫より南十余町に南の窟〈七窟の内也。本編にも見ゆ。大南の窟とも云。東西三間、南北五間あり。〉奇絶の地也。」

以下の調査は上記の記事を根拠に行った。

3 中院跡

東院谷の青面金剛碑より300mほど下った大谷尾根西側の谷沿いに小規模な石組み群があり、祠の基壇と思しき石組みと沢側に窟とみられる岩陰を持つ大岩がある。谷の沢沿いのため崩落により明瞭なルートは認知しにくいだが、切れ切れながら道のあった痕跡がある。『大巡行法』の記載によれば中院には窟と瓶（甕の祠）があり、『附録』によれば不動と毘沙門は堂舎があり、その北に軍陀利夜叉明王、烏須沙摩明王が祀られる。

現場には約4m四方の石組みや石垣により区画された平場が3つあり、平場の中央付近に建物の基壇とおぼしき石組みがある。小祠跡Bとしたところには1m四方、高さ40cmの石組みが中央に配置されている。小祠跡Bは小径で小祠跡Cとつながり、小祠跡Aとは石段をもつスロープでつながっている。小祠跡B,CはAより4m高い北側に位置する。小祠跡Aの東側の沢にある推定の窟は小祠跡Aより約12m下がった位置にある。小祠跡Aの基壇とおぼしき石組みは乱れて明瞭ではないが、この位置を不動・毘沙門の堂、BとCを軍陀利夜叉明王、烏須沙摩明王を祀った跡と推定した。遺物は測量調査を主眼としたため積極的に探索しなかったが、窟の岩陰内に中世以降のものと思われる丸瓦が見られた。余談だが東院谷から下る谷筋が『宝満山山中絵図』のいう中院谷とみられるが、ここには東の尾根に連なるきつい斜面をごく小規模に段造成し石垣を築いて茶園としていたと思われる、今でも茶の木が散在している。小祠跡B,Cの北には近・現代のものと思われる炭焼窯に至る小径が形成されている。このことから東院谷から中院に至る大谷尾根西側の谷筋は近・現代まではルートとして往来があったことを示している。

4 大南窟

中院から大南窟までは『大巡行法』の記載によれば「寝手権現」と「古所権現」を遥拝することとなっている。『附録』にある「飛礫石嶺」や「蟾蜍石」などの名称が見られる。寝手権現は大根地山、古所権現は古処山と思われ、中院から南に下りながら途中の石嶺によじ登り南東の見晴らしのある場所で諸山を遥拝したものと思われるが、杉が林立する現状では場所の特定は困難であった。現状では中院跡から「かもしか新道」を経て旧来から「大南窟」とされる場所まで約350mを測る。

大南窟は麓の筑紫野市阿志岐や大石からも目視できる白亜の巨岩で、20m以上屹立する陽石とその根元に上下2つで構成される窟から成る。陽石は花崗岩が節理で自然崩壊した岩の塊で、山肌とは13mほど隔っており（断面E-E'）、その間には平坦な空間があり、岩の根元の北西側と東側に約1m四方の石組の祭壇が見られる。窟は屹立する陽石の南西側にあり、上窟は平坦な空間より4m下に、下窟は12m下にある。上窟は長さ（A-A'）5m、幅（C-C'）3m、床から天井の高さ2.4mの古墳の玄室のような方形を呈し、北東隅に平石を積んだ祭壇が設けられ尊像が置かれる。下窟は間口5m、雨落ちからの奥行10mの平面形は楔形で奥に行くに従って高さを増す形状となっている。雨落ちから若干中に入った位置と中央付近に石列が施される。上窟は現在でも入峰灌頂などの儀礼、行場となっている。

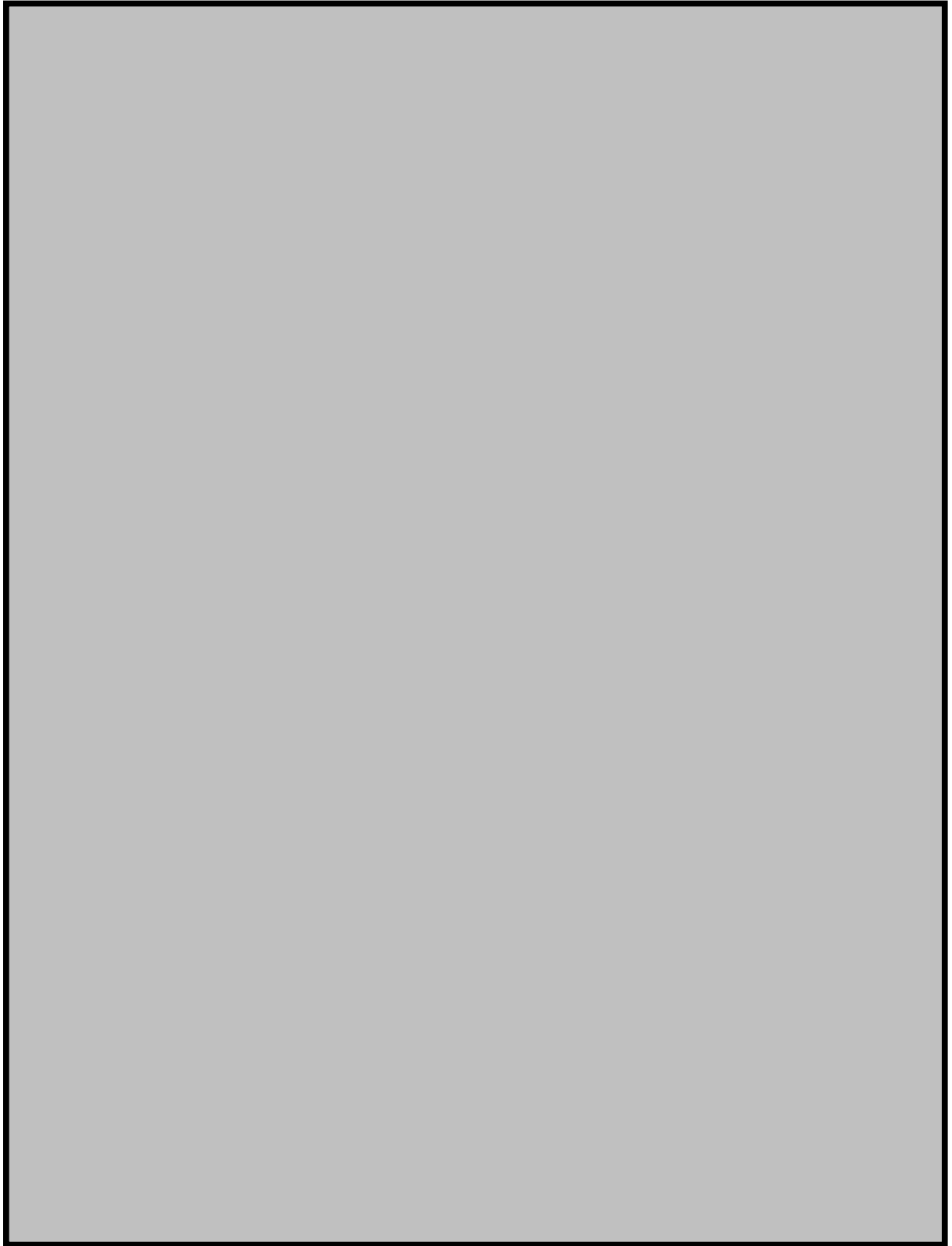


図2 推定中院跡測量図

5 大南窟出土の遺物

小西氏と山村が過去の調査で採取した遺物を紹介する（器種名は太宰府市文化財分類に準拠）。

須恵器

蓋3 (1・2) 1の口縁端部は下方に屈折し、やや外反する。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。内側の中央部付近は回転ナデ後にナデ調整が施される。復元口径は13.8cmで、色調は青灰色から暗灰色を呈する。2は口縁端部が1に比べて厚い。復元口径は13.2cmで、色調は薄青灰色を呈す。

蓋c (3) 外面中央にボタン状のツマミを貼り付ける。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデである。内側の中央部付近には不定方向のナデ調整が施される。復元口径は14.2cmで色調は青灰色から黒灰色を呈す。

坏c3 (4・5) 4は外面回転ヘラケズリ。底部には高台があり、粘土紐を貼り付けた後に回転ナデを施している。底部中央付近には不定方向のナデ調整が施される。また、内面底部にも同様の調整が施される。高台は外側に張り出した形である。復元高台形は11.8cmを測り、色調は淡灰色を呈す。5は内外面に回転ナデ、外面底部には端部がやや尖った高台が作られる。内面底部には不定方向のナデ調整が施され、黒褐色の付着物が見えるほか、赤色顔料が薄く残っている。復元口径16.6cm、復元高台径11.2cm。色調は薄青灰色を呈す。

皿a (6) 外面は強く押さえた回転ナデ、底部には回転ヘラケズリ後にナデ調整が施される。内面は回転ナデ、底部にはケズリ気味のナデ調整が施されるほか、赤色顔料が薄く残っている。復元口径は18.0cmで、色調は灰色を呈す。

壺a×b (7) 外面は不定方向のナデ。底部には高台があり、粘土紐を貼り付けた後回転ナデを施す。内面底部は同心円文の当具痕が残り、その他は回転ナデ。復元高台径は12.2cmで。色調は、外面は黒褐色から赤褐色味を帯びた淡青灰色。内面はやや黄色味を帯びた薄青灰色を呈す。

壺 (8) 底部から胴部の破片である。内外面回転ナデ、外面の一部に回転ヘラケズリが施される。復元高台径は8.9cmで色調は内外面灰色を呈す。

壺d~f (9・10) 9は肩部付近の破片で、外面轆轤成形によるナデの後回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。色調は内外面とも青灰色を呈す。10は壺の肩部で色調は内外面とも青灰色を呈す。

小壺 (11・12) 11は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は上方に屈折し、端部は指で摘まみ出され尖った形になる。内外面に回転ナデ、外面頸部にナデが施される。復元口径は7.0cmで、色調は内外面とも青灰色を呈す。12は頸部から底部にかけて残存する。外面は回転ナデ後にナデ調整。底部は不定方向のナデ調整が施される。内面は回転ナデ。復元底径は5.0cmで、色調は内外面淡青灰色を呈す。

鉢a (13~15) 13は外面上半部に回転ナデ、下位は回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。色調は外面青灰色、内面は淡青灰色を呈す。14は口縁部辺で、内外面回転ナデ。色調は内外面とも淡青灰色を呈す。15は底部付近の破片である。外面は回転ヘラケズリで、部分的に煤が付着する。内面は回転ナデ後縦方向のナデ調整が施される。色調は内外面とも薄青灰色を呈す。

鉢b (16) 口縁部片である。内外面とも回転ナデ。色調は黄灰色を呈す。

土師器

小皿a (17~31) 復元口径は8.2~11.5cm、器高0.9~1.7cm、復元底径6.0~8.6cmを測る。口縁部付近は回転ナデ、内面底部はナデによる調整が施される。外面底部は回転糸切の後、板状圧痕が残る。個体によっては板状圧痕がみられないものがある (18、19、21、23)。

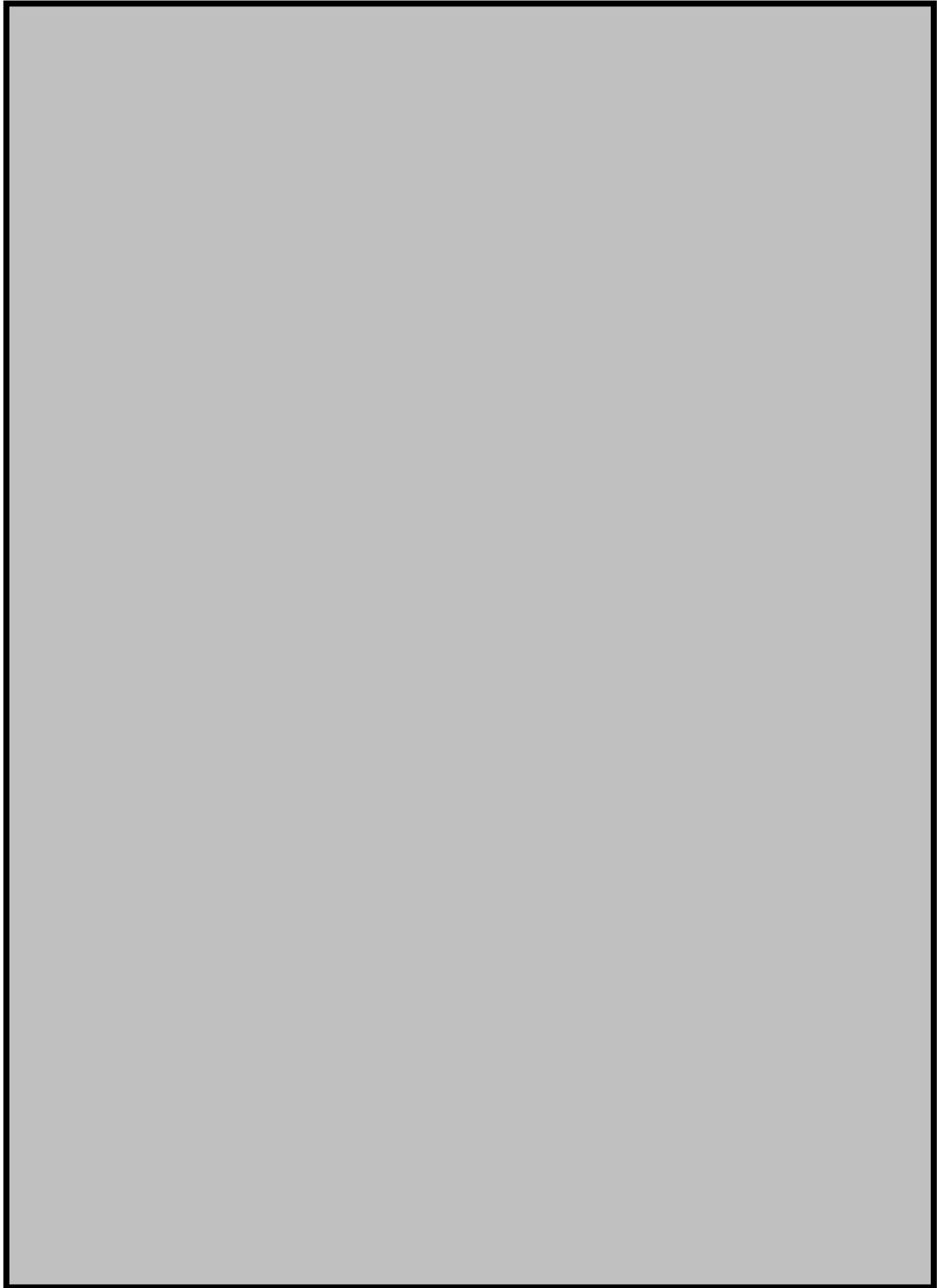


図3 大南窟測量図



図4 大南窟出土遺物実測図 (1/3、1/2)

小皿b (32・33) 32は外面回転ナデ。底部は回転糸切の後、板状圧痕が残る。内面は口縁部まで多方向のナデ調整が施される。復元口径は8.0cm、色調は内外面とも淡黄褐色を呈す。33は外面回転ナデ、底部付近にはナデ調整が施される。底部は回転糸切による切り離しの後、板状圧痕が残る。内面は口縁部から底部付近にかけて回転ナデ、底部にはナデ調整が施される。また外面から内面口縁部にかけて煤が付着する。復元口径は8.4cmで色調は内外面とも淡灰白色を呈す。

小皿c (34) 外面口縁部付近は回転ナデ、底部は高台となる粘土を貼り付けた後、回転ナデを施す。内面は口縁部付近に回転ナデ、底部は丁寧なナデを施す。復元口径は9.6cm、色調は淡黄褐色を呈す。

坏a (35~37) 復元口径14.0~17.6cm。外面回転ナデ、底部は回転糸切後、板状圧痕が残る。内面は回転ナデ、底部はナデ調整が施される。色調は内外面淡黄褐色から淡黄白色を呈す。

大皿a (38) 外面回転ナデ、底部は回転糸切による切り離し。内面は回転ナデ、底部は不定方向のナデ調整が施される。復元口径は20.6cmで色調は淡黄褐色を呈す。

大皿c (39) 外面回転ナデ、底部は粘土紐を貼り付けて高台を作る。内面は不定方向のナデ調整が施される。復元高台径は12.2cmで、色調は淡黄褐色を呈す。

中国陶器

壺蓋 (40) 体部を一部欠損する。外面頂部には相輪を模した突起状の紐がつく。紐は2段になっており、紐高は3.8cmを測る。天井部の縁には高台状の粘土が巡り、貼り付け部分に罅が入る。調整は内外面回転ナデ。焼成は須恵質で還元は良好である。復元口径は9.7cm、器高は9.4cmで色調は内外面とも灰色を呈す。また、外面にはごく薄い黄灰色の釉がかかる。経筒の外容器の蓋と考えられる。

壺 (41) 底部片である。外面回転ヘラケズリ、底部にはケズリ出しで高台が作られる。底部は回転ヘラケズリ。また、底部付近まで茶オリーブ色の釉がつく。内面は回転ナデで、外面同様に釉がつく。復元高台径は8.4cmを測る。

石製品

加工滑石製品 (42) 頭部を一部欠損する。楔形の滑石製品で、表面には細かく削った跡や縦方向に削った痕跡が残る。頭部付近には径3mmの穿孔が施される。留め具の一部か。長さ4.6cm、幅1.8cmを測る。

金属製品

銅銭 (43) 皇朝銭「神功開寶」である。径2.6cmを測る。

これら過去の調査で採取された遺物は小西信二氏等の調査によれば、中世のものは大半が平坦な空間より北東側の斜面にあり、須恵器等の古代のものは南西側にあったとされる。経筒と思しき中国陶器は窟のある南西側のもので、神功開宝は上窟北東奥にあった。古代、中世において窟内で祭祀がおこなわれたことが明確であり、中世においては屹立した岩周り、ないしは見上げる位置で土器を用いた祭祀がおこなわれていたことが想起される。

奈良時代の須恵器は、天井部に回転ヘラケズリを残す8世紀でも前半の特徴を持つ坏蓋 (1) を含み、8世紀後半から9世紀前半頃の小壺 (11,12) を含んでおり、東院谷や辛野遺跡などの山中他所の傾向と一致する。小壺は山頂や隣の四王寺山山頂でも見つかっており、太宰府近郊の山岳での祭祀に共通した道具とみられる。鉢a (13~15) は鉄鉢を模した土器で、寺院関連の遺跡から出土することが指摘されている。窟では英彦山四十九窟の一つである宝珠窟 (東峰村岩谷神社遺跡) から出土しており、興味深い。窟の出土遺物で類例があるといえ、経筒を窟に安置することは豊前

求菩提山吉祥窟例に見ることができ、天台の修法の一つと見られ、山中が天台化していった契機を伺うことができる資料といえよう。経筒の外容器は山頂の石裂中からも採取されており、大南窟の山中での位置づけを考える上で重要な遺物である。土師器は鎌倉期のもので大皿a (38) とc(39)は宝満山の隣の山岳寺院跡の原山(原遺跡)でも同じものが出土しており、油煙が付着することから灯明皿として用いられた仏器と認識される。

6 行場と遺跡

大巡行は東院谷の薬師堂を発したのちに、生活域に包含されたり接したりする聖地から離れ、中院谷に至って山林に入り、「奇絶の地」とされた大南窟に至って前半のピークとなるよう設定された。中院はまさに聖俗の中庸の地であり、「中院」は「中陰」に通じ生と死の境を示す。行者が厳しい行において自己を投影する対象としての不動明王と毘沙門天に対面する場として準備されたのではなかろうか。

8世紀に利用された祭祀の場がどのようにして後代に伝わったものか、大南窟は中世を経て近世の巡行においても聖地とされ、宝満山信仰の核心的な要地として引き継がれてきたことが改めてわかった。近世宝満山でおこなわれた大巡行は、本山での行を写して催行された行事というだけでなく、「風神祭」とならび古代から連綿とおこなわれてきた宝満山中での祭祀を引き継ぐ行法として催行されたと認知され、歴史的に重要な行事であったといえよう。

【参考文献】

- 森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』2008年 財団法人太宰府顕彰会
 太宰府市教育委員会『宝満山総合報告書』2013年
 筑紫野市 太宰府市『史跡宝満山保存活用計画』2020年
 東峰村教育委員会『岩谷神社遺跡』2007年

(やまむら・のぶひで 太宰府市教育委員会文化財課調査係長
 なかむら・しげお 太宰府市教育委員会文化財課主任技師)